

最終試験の結果の要旨

報告番号	保研 第 44 号	氏名	赤井田 将真
審査委員	主査	田平 隆行	
	副査	宮田 昌明	副査 柳間 春利
	副査	永野 聡	副査 古島 大資
<p>主査及び副査の5名は、2024年9月20日（金）18:00-19:00に共通教育棟502号室にて学位請求者 赤井田将真に対し、論文の内容について質疑応答を行うと共に、関連事項について試問を行った。</p> <p>具体的には、以下のような質疑応答がなされ、いずれについても満足すべき回答を得ることができた。</p> <p>【審査委員の質疑および学位請求者の応答】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <u>本研究における多様な生活活動が身体機能に保護的に働くという結果は予測通りだったのか。</u> →結果は予測通りであった。仮説検証として想定される結果が得られている。予測される結果ではあるが未知の知見であった為、新規性のある報告となっている。 ・ <u>群間比較をする際に一群のサンプルサイズ（20名）が少ないが妥当性はあるのか。</u> →サンプルサイズとしては少ないが妥当性は担保されている。具体的には、運転状況および生活活動の四群と共変量（年齢、性別、服薬数、独居）において交互作用を確認したところ有意差はなく、回帰の平行性を仮定できるため共分散分析が適応可能であり、推定値の妥当性は担保されている。 ・ <u>自動車運転中止の特性として地方と都会の違いはあるのか。</u> →公共交通機関などの利便性などから考えられる環境的側面の違いはあると考えられる。ただし、それらを具体的に示す報告はなく科学的コンセンサスは得られていない。地方と都会の違いを明らかにするために、今後居住地等の地域特性を考慮した解釈、研究が必要になってくる。 ・ <u>Table1における運転状況と生活活動における四群間での独居の有意差の解釈はどうしたらよいか。</u> →事後検定にてボンフェローニ検定を行い、各群に有意差があるのかを検討した。結果として、運転を中止して生活活動への関与が少ない群が最も独居の割合が高いことが結果として得られている。 ・ <u>量的研究で男女を層別化したらどうなるのか。</u> →全体で示される結果と同様な傾向がみられる。ただし、統計検出力としてサンプルサイズの限界もあり解釈出来る結果は得られていない。 ・ <u>質的研究の結果は、女性には適用できないのか。</u> →本研究の質的研究では男性のみの対象者集団であるため、外的妥当性は担保されておらず女性には適用できないと考える。 ・ <u>コホート研究であれば、運転免許返納前後の生活活動の変化を捉えること重要な視点なのではないか。</u> →重要な視点であり実践しようと試みたが、本研究フィールドのコホート研究ではサンプルサイズの問題もあり量的研究での実施は困難であった。ただし、質的調査でのインタビューの中では運転免許返納以前から生活活動への関与が多い者は免許返納後であっても生活活動への関与は維持されている者が多い印象であった。 			